



行事写真

サービスハウス通信

第 11 号

H23 年 10 月 8 日

発行

社会福祉法人東光会
サービスハウス 事務局

TEL084-941-5255



9 月 22 日おねえチアダンサーズの皆様が、アネックスを訪問して楽しいダンスを披露してくださいました。みんなで楽しく、1・2・3・・・



孫悟空スタッフさんのハロウィン帽子を
拝借して・・・「ウ・フ・フ・・・」



十月四日孫悟空に焼肉を食べに行きました。皆さん、食欲の秋満喫された様子でした。

蟹の床屋
中島 栄

ええ、蟹の床屋でござい！
髪を刈りましょ チョキンな
足の爪を切りましょ
そこのおいしいちゃん
チョキ チョキ チョキとね
痛くないでしょ

お針仕事のおばあちゃん
糸を切りましょ、チョキンとね
横に歩いてチョキンな
チョキンチョキンチョキンな
忙しい忙しい チョキンな

「青春」
郡 誠司

シベリヤに
青春虜られ
徹夜の星
げんや

私の
いちばん！

シベリヤへ送られて Ⅲ
郡 誠司

* 殿堂の入浴場 *

ラーゲリに入ってから、二週間が過ぎた頃所長の命令が出たのだらう。部隊全員が入浴に行くことになった。日本兵は長い間風呂に入っていないので、気のきいた計らいだった。

一中隊より順次朝からの出発になる。どれ位歩いたか、約一時間半の行軍だった。着いた浴場は正に殿堂と言っても良かった。この地方の正規な規模を持っている立派な浴場だった。広い浴室にはベッドの様な台がいくつも一隅に湯と水の出るバルブがついていた。

現地では浴槽がない代わりにサウナの設備があって、ここで体を充分温めてから、ベッド台へ行って体を洗うのである。他に高熱滅菌室があって、現地の人も洗濯はせず、衣類を乾燥させるのである。日本兵たちも着ぐるみ鉄の輪に通して、依頼してから体を流し乾燥の仕上げを待っていた。洗濯まではしなくてもサラッとしていて心地良いものであった。

またも、ラーゲリへ帰る行軍が続いたがその日一日は入浴デーになってしまった。

* 知らぬ間かぬ *

いつだったのか、知らぬ間に将校たちの顔を見なくなっていた。ソ軍司令部へ連行されたのだろう。見習い士官、下士官がラーゲリに残る最高幹部になっていた。一番上級が曹長になる。兵隊たちも階級など必要としなかった。それぞれに階級章をもぎ取って捨ててしまっていた。

兵隊たちの作業については、もう階級ではない少人数のグループで、土建組とか、機械組とか建設組とか出来て、信頼のあるものを組長と呼んで組織されていた。僕にしても隊に居る時から木工手だったので、建設組の一部を木工班として本物の建築棟梁だった人の配下で働くことが多かった。

このような組織が出来てから多くの組でノルマが上がっていた。

* 防寒 *

十一月、十二月と次第にシベリアの極寒が身にしみて来るようになった。この頃には、関東軍の防寒外套、防寒靴等が支給されたが、内部が毛皮であってもこの土地には順應

するものではなかった。ただ衣類は毛糸作りだったので寒さを防いでいた。防寒帽はなんとか役に立っていたものだった。

終戦になってからは隊からの靴下・軍手などの支給が無くなったので次第に消耗して万作の計も無くなってきたものだ。ただ、防寒大手袋が頼りになっていた。

機械工場となるレンガ積み建設現場へはまだ続いて作業に行っていた。極寒の地でなぜ煉瓦積みが出来るのか？

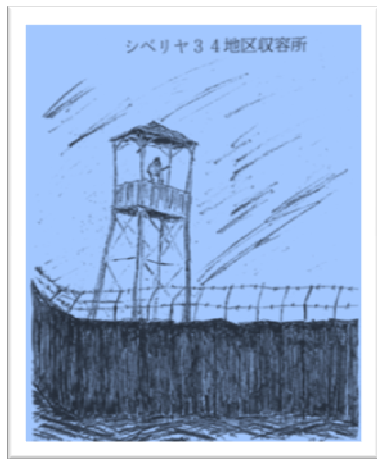
セメントを練るのには水を使っていたが、現場の煉瓦積みでは、コテでセメントを一個分すくってのせるとすぐ様その上に煉瓦をのせる。

この技が経験によるもので少しでも位置が悪いと、セメントをのせ換えて煉瓦をのせていく。もう、ビルの五階に達するまで積んでいた。極寒の中でも空気が乾燥しているから問題なさそうだと聞いていた。

* トイレの話 *

現地のどんな工場にでも設備はあるが、仕様は皆同じである。ラーゲリでは、大きな掘立小屋が作られ深さ4メートルの堀の上に、分厚い板が敷かれ大人の等間隔に丸い穴が開けられて前後で三十人位が並んで用便が出来る。薄い暗い屋内でもあり同姓が並んで何の抵

抗すら無かったのである。小用は屋外の小さな池に四、五人が並べる大ききで利用されていた。ただ、工場では男女の仕切りは作られていた。珍しいから書いた迄にしておこう。



絵 郡 誠司

* 遺体の埋葬 *

十一月頃の出来ごと、この頃栄養失調による死没者が出ていた。遺体の安置天幕へ行ってみると、見るも哀れな姿。ふんどし一枚を残して素っ裸で、四肢を上にあげ、五体が積重なっていた。埋葬の使役に出たのは僕を含めて五名。ソ軍の馬ソリに五体を載せソ軍兵が馬を引いて遥かに遠い山麓へ向かった。

現場に着いて穴を掘れと言うが、スコップもツルハシも凍結の地には受け付けない。表面の雪かきをした位で遺体を並べて雪をのせた位でその場をつくらしたのである。日本兵の僧がついていて、お経をあげて帰路についた。

帰りは馬ソリに乗せてくれたが使役に出ていたこちらの身が凍りそうだったのである。

* 昭和二十年年末 *

時計を取り上げられてからは、時間には不自由していたが作業場では現地のロスキーたちの行動で帰る時間は分かっていた。

兵隊たちはもう近日で年末になることは知っていたし、何日何曜日はカレンダーが無くて承知をしていたものだ。とうとう年末まで作業に休みが無く昭和二十年は終わったのである。

翌日は、二十一年の正月元日である。兵隊たちはただ一日の休日。翌日からは作業だった。現地のロスキー達も作業にでいたものだ。

参考(日常使っていたロシヤ語)

ヤボンスキー・・・日本人
ロスキー・・・ロシヤ人
セルダート・・・兵隊
カンボーイ・・・警戒兵
マッセル・・・現場監督
ペリオーチク・・・通訳
マダム・・・すべての婦人に対して



郡さんの昭和二十年のお話は今回で終了。次回から昭和二十一年のお話になります。

1日の中で気温差が大きい季節、脱ぎ着しやすい服装で体調管理に気を付けてください。(K)